

Legend of CrabLand

あるいは蟹と蟹王国の伝説



第1話 出会いは突然に

第1話 出会いは突然に

夕飯の買い出しに行かせた姉たちを待ちながら、あたしは待ち合わせの井戸にもたれて舌打ちをした。夕暮れはもう近い。あいつら一体どこで油売ってやがるんだろうと苛々しながら4本目の煙草に火をつける。大体もう25と23なんだから、買い物くらい自分で出来ねえとな。あたしはフンと鼻で笑った。

もう覚えてないくらいに母親が死んで2年前に父親が再婚し、その後父も死んで新しい父がいるのだが、継母には娘が二人居た。二人とも継母に負けないくらいブスで性格が悪い。継母と義理の姉たちに虐められてこき使われるなんて、今時流行らねえっての。

最初の頃、あたしに家事一切をやらせようとしやがったので、姉二人にはちょっと現実って奴を教えてやった。具体的にはボコにして半日井戸に落としてやったんだが、効果はテキメンで、やつらはあれ以来あたしの奴隷ってわけ。

煙草を吹かしていると、馬鹿どもが帰ってくるのが見えた。

「ど、どうぞ、イーリス様」

差し出された籠を受け取り、中味を確かめてあたしはふーん、と呟く。そうすると馬鹿1号がびくっとするのが分かった。

「あの、何か、イーリス様……？」

「釣りが少ねえような気がすんだけど」

じろっと二人の顔を見ると、馬鹿どもは怯え上がったように身を寄せ合って、それから馬鹿2号が口を開いた。

「お塩が値上がりしたみたいなんです、ほんとです」

「ま、調べりゃあすぐに分かるこったがな。そういうことにしといてやるよ、ほら、さっさと家に帰んな。あたしが怒られるじゃないか」

流石に父にばれるとマズイので、継母と義父の前ではあたしは大人しくしているのだ。が、あたしにいつかつた用事は大抵奴隷1号と2号にさせている。継母も義父の前では大人しいから、いい勝負だ。大体、継子を奴隷にしようっていう、その根性がねじ曲がってる。まあこっちも大人しくしているふりしてこいつらをこき使ってたんだから、おあいこだろう。

馬鹿どもが家に戻っていくのを見ながらあたしは5本目の煙草を取り出した。少しは時間をおいて帰らないと、変に勘ぐられたらたまらない。あの馬鹿どもは完全にあたしの奴隷だからいいけれど、いつかあの継母にもぎゃふんと言わせてやりたいな、へっへっへ。

そんなことを考えながらあたしは買い物籠を掴んで歩き出し、そしてふと足を止めた。

……何か、声がしたような気がしたのだ。なんだろう。あたしはきょろきょろと周辺を見回すが、しみったれたいつもの村以外のものは何もない。気のせいかと歩き出そうとすると、今度ははっきりと耳に聞こえた。

「そ、そこな乙女よ……」

弱々しいけど確かに人の声だ。通り過ぎかけていた草むらから聞こえる。

あたしはじっと考え込む。

最近王都にどっかの国が攻め入ってきたとかで、こんな田舎には軍隊も何も関係ないんだけど、追われてきた騎士とかは時々見かける。その類だろうかと思いながら、でも変に首突っ込んで自分までとばっちりを受けるのは大迷惑だ。

相手を見て格好良かったら助けてやろうと決めて、あたしは草むらを覗き込んだ。

「……………カニ……？」

あたしはぼんやり呟いた。草むらに倒れて…….るのかどうかよく分からないんだけど、とにかく甲羅を上にして落ちているのは確かにカニだった。結構見事なタラバガニ。

「カニではない！」

急にそのカニが怒鳴った。さっきまで弱々しくこっちを呼んでたくせに、こんな時だけ元気になるのはみんな同じだ。

「カニではない、余は、余は、サティラーン15世なるぞ」

「はぁ？」

サティラーン15世というのは確か、この国の王子だったような気がする。噂で聞くだけだけど、超絶美形で気高く優しいとか何とか…….あたしはじっとりと目の前のカニを見た。甲羅が傷ついたり、足の動きがとろかったりと本当に傷ついてはいるらしい。

あたしの視線に気付いたらしく、カニはゆっくりハサミを振った。

「今の私は本来の姿ではないのだ、乙女」

「ふーん」

あたしはカニを草むらに戻して家に帰ろうと歩き始めた。ガイキチに関わったらいけない。カニだからちょっとだけ手当てしてやって回復したところをパクリでもいいんだけど、流石に喋るカニは抹殺しづらいのだ、あたしでも。

「ちょ、ちょっと待て乙女！ 余の話に興味はないのか！ 待てたら！」

草むらからカニのサティラーン15世が叫んでいる。無視しようとしたあたしの足は、けれど次の言葉に止まった。

「話を聞いてくれたら王宮の侍女にしてやるぞ！」

王宮の侍女。それはエライ人たちのお茶や遊び相手を勤める職業だ。勿論、豪華な食事にドレスに夜会に宮殿に……. 豪華絢爛なバラ色に塗り潰された空想が頭を一周し、あたしは足を返した。侍女という話が嘘だったら鍋でいい。聞くだけならタダだ。

あたしが戻っていくとサティラーン15世はぷくぷくと泡を吹いていた。泣いてるんだろうか喜んでるのか、カニの感情表現はイマイチ分からない。あたしはカニを拾い上げて井戸まで戻り、取りあえず泥だらけの甲羅を洗ってやった。と、サティラーン15世は身もだえしてぜえぜえ荒い呼吸をしながらあたしの手を押しつけた。

「た、頼む、洗うなら塩分が5%程度の水にしてくれ…….真水は身に染みるのだ」

海生生物なのでどうやら真水はまずいらしい。あたしは注文の多さにむっとしながら真水を拭き取りついでに甲羅を綺麗にした。

「で、話って？」

あたしは井戸にもたれて座り込みながら聞いた。自称サティラーン15世はうむ、とカニなりに重々しく頷いて長い溜息をついた。

「実は、王都に突然カルロ王国の軍が攻め入って参ってな……父上と母上は敵の手に掛かってお最期を遂げられ、私は魔術師の呪いにかかり、こ、このような、口にするのも汚らしい、この姿に……ううううう……」

カニはひたすら泡を吹きながら主張していたが、あたしは半ば白けて井戸の石組みに蒸した苔を爪でひっかいていた。大体その話を良く考えると、実は王国ってとっくに滅びてるんじゃないのだろうか。田舎の村にはあんまり王様が誰でも関係ないからなあ。そうすると、王宮の侍女とか言うのはこの自称王子さまのカニの作り話に近い。

あたしの反応が薄いことにサティラーン15世は気付いたらしく、乙女、と重い声を出した。「私は王都を奪回し、父上と母上の敵を討ち、王国を復興せねばならぬ。どうか力を貸してくれまいか」

「それは別の人に頼んでよ」

あたしは即答し、溜息になった。

「大体このカニが王子さまですって言われてさ、はいそうですかって信じる訳ないじゃん。それにあたし、今の生活が気に入ってんだ。大体、何であたしなのさ。他にも沢山、もっと頼れる人がいるでしょ」

「それが……魔法使いの呪いを解くには乙女の真実の愛が必要で……」

なんじゃそりゃ。やってられるか。あたしが思い切り鼻白んだのを感じ取ったのか、カニはしかし、と強く言った。

「いずれ私を宮廷魔術師たるクレーロスが発見するであろう。私を安全な場所に魔法で飛ばしたのは彼だからな。クレーロスから話を聞いて欲しい。どうか乙女、それまで私を匿って欲しいのだ」

「見返りは？」

サティラーン15世はちょっと怯んだように泡を吹いたが、やがて言った。

「王国を取り戻したら乙女の望みを全てかなえよう。だからしばらく安全な場所に……」

「分かった分かった」

あたしは大きく手を振った。あんまり遅くなっても具合が悪い。

既に日は落ちてしまっていて、継母が痺れを切らしているに違いない。あの女がきゃんきゃん吠えたところでちっとも怖くも何ともないし用事は全部あの馬鹿女どもにやらせればいだけだから痛くも痒くもないんだが、煩いことは煩い。

「取りあえず、あたしの家に行こう。ていうか、カニが喋るとみんなびっくりするから絶対黙ってろ」

自称サティラーン15世はこっくりとはさみで頷いた。

家に戻ると案の定、継母がぎんぎん騒ぎ立てた。今日の夕飯は抜きだとかぬかしやがる。釣り銭まで文句をつけられて、あたしは多少腐り気味だ。夕飯はどうやっても抜き、になったよ

うだったのであたしは部屋に引き上げた。あたしの髪に隠れて背中にしがみついていたサティラーン15世が降りてきて、何と非道い母親なのだとこぼしはじめたので、あれは継母だと教えてやった。

「そ、そうなのか乙女……そなたも存外苦労しておるのだな……なんと哀れな」

カニに哀れんでもらわんでも結構だが、サティラーン15世は甲羅を震わせている。カニかどうかはともかく、優しいの部分はどうやら本当らしい。

「乙女、いずれ王国を取り戻した暁にはそなた、王宮にくるか？ あそこなら誰もお前に無理無体をせぬ」

「あーはいはい、王宮っての、いいね」

適当に返事をしながらあたしはサティラーン15世の甲羅を撫でた。夕飯はこれにしようかな。喋るカニってのに惑わされずに冷静になればこれは食料なんだし。

どうしようかな、と思いながらあたしがサティラーン15世と適当に話をしていると、突然部屋の扉が開いた。なんだよ、と思いながらそっちを見ると義父と継母と馬鹿どもがあたしを異様な目で見ている。

「イーリス、一人で先ほどから何を喋って……」

義父は言い掛けたのを途中で何故かやめ、そしてイーリスと怒鳴った。あたしは首をすくめた。義父はつつかと歩み寄ってくると、サティラーン15世を掴んでおお、と体を震わせた。

「エビカニはご禁制になったのを知らんのか、イーリス」

「なに、それ」

初耳にあたしはきょとんとした。義父は真っ青になって震えている。

「法律が変わってエビカニは飼うのも駄目、売買も駄目、もちろん食べるのも駄目になったのだ、イーリス。死刑になるんだぞ」

あたしはぎょっとしてサティラーン15世を見た。さっき言いつけた通りサティラーン15世はあたし以外の人間がいるから口を聞かないが、このタラバガニを所持しているだけで死刑だなんて、そんな馬鹿なことがあるか。

あたしが茫然としていると、義父はサティラーン15世を掴んであたしの胸に押しつけた。

「お前がこれを持っていたことが分かると俺たちまで死刑になる。今すぐ出ていけ、イーリス」

「ちょ、ちょっと待ってよ、甲殻類が駄目って何で……」

「お偉い人のすることなんか知るか！ とにかく出ていけ、イーリス！ お前はうちとは関係ない娘だからな！」

何かを反論する暇もなく、あたしは蹴り出されるようにして追い出された。義父の肩越しに見えた馬鹿1号2号の嬉しそうな顔ったらなかった。

忘れ物だ、とあたしに更にサティラーン15世を放り投げ、義父はばたんと扉を閉めた。あたしは急いで立ち上がり、扉を蹴りながら叫んだ。

「馬鹿野郎、この家はなあ、あたしの父さんが働いて建てたんだぞ、全部横取りしやがって！ 出ていくのはお前らだろう、返せ、返せよ、あたしン家！」

そうやって喚いていると、隣の家のパバァが顔を出した。

「あらまあイーリスちゃん、一体何を……」

が、そのババアもサティラーン15世を見た瞬間に顔が固まった。エビカニ禁令というのはどうやら本当らしい。

「い、イーリスちゃん、そのカニ……いいえ、見なかったことにしてあげるから、はやくおうちへ入りなさい、ねっ」

それだけ言ってババアも引っ込んでしまった。あたしは怒りでふうふううなりながら、家の扉をがっつと一発蹴った。

「くそう……覚えとけよお前ら……絶対にいつか後悔させてやるからな……！」

あたしは呟き、そして固まったままのサティラーン15世を抱き上げた。

「すまない乙女、おそらくカルロ王国の者たちが私がこのような姿に身をやつしていると知って、密告を促す為に禁令を出したのであろう……」

心底申し訳なさそうなサティラーン15世にあたしは言った。

「ねえ、王国を取り戻したら何でもしてくれるって言ったの、ほんと？」

あたしの低い声に、サティラーン15世は重々しくそうだ、と言った。

「何でもそなたの思うままじゃ、乙女」

よし、とあたしは頷いた。追い出されて行くあてもないし、密告に賞金が出ているなら絶対に義父と継母はあたしを訴えるだろう。要するに、掴まったら死刑だ。なら、やれるところまでやったろうじゃないか。

覚えてろ、こんちくしょうめ！ あたしと蟹が王国を取り戻した暁には貴様ら全員まとめて蒸し焼きにしてくれる！

あたしはサティラーン15世をむんずとつかみ、夜の中へと走り出した。

そしてここから蟹と王国の、サーガが始まる。

第2話 恋の魔法は唐突に

第2話 恋の魔法は唐突に

ぼくはきのう、はじめてのおつかいに、いきました。おかあさんがびょう気なので、ぼくとおにいちゃん、おかあさんのかわりにお店に行くことにしました。おかあさんは、

「さい近は人げんがつよいので、気をつけてね。」

と、言いました。おにいちゃんが、

「だいじょうぶだよ、おかあさん。人げんなんて、おれがやっつけるよ。」

と、言いました。ぼくは、ちょっとこわかったけど、おにいちゃんもいっしょなので、いっしょにいこうとおもっていきました。

おみせは森のさきの、ガゼーおばあちゃんのおみせです。ぼくたちのしゅるいは、スライムといます。ぼくたちはおにくを食べるので、おにくを買いに、いきました。

おかあさんがおかねをくれたので、おにいちゃんがおかねをもってふたりでいきました。おかあさんが、

「おつりでおかしを買っていいわよ。」

と、言いました。とてもうれしかったです。

そうしたら、ガゼーおばあちゃんのおみせに行くまえに、森をあるいていたら女の人がいきました。

女の方は

「あり金ぜん部おいていけばいのちだけはたすけてやるぜ」

と、言いました。おにいちゃんがいやだというと、女の方は、おにいちゃんを木のぼうでいっばいたたきました。おにいちゃんがうごかなくなると、女の方はおにいちゃんのもっていたおつかいのお金をとりました。

ぼくは、

「それはおつかいのお金です。」

と、言いました。

そしたら女の方はぼくもたたかれたので、ぼくは一しょうけんめいはして、家にかえりました。つぎの日におにいちゃんを見にいくと、おにいちゃんはからからになっていて、うごきませんでした。おかあさんは、

「おにいちゃんはしんだのよ」

と、いきました。

とてもかなしくて、ぼくはいっぱいなきました。とってもかなしかったです。

「……チッ、しけてやがんな」

あたしはぶちのめしたスライムからむしった銅貨を数えていや～な顔をした。まったくこの森のモンスターどもと来たら、もうちょっと人間様を襲ってがっぽり持ってるんだと思っていたが、意外にしみたれている。これはもうちょっとこの森でスライムやらこうもりやらと格闘して、さっさと戦闘用のナイフでも買うべきだな。それで、襲うのを雑魚モンスターから人間に路線変更すりゃあもうちょっと実入りが良くなるっていう仕組み。なにしろあたしは稼がなくてはならないのだ。世界を救うためでも王子を守るためでもない。……だって金がなくっちゃ飯も食えないじゃないか！

時々、いっそのことあのカニ食ってやろうかと思うのだが、なかなかチャンスがつかめない。カニのくせに妙に気配に敏感で、あたしが奴を食おうかどうかどうしようか迷っているときに限って、王宮の話を持ち出したりするのだ。正直、王宮には魅力がある。3食昼寝付きで毎日遊んで暮らせる場所だ。国家権力にも関心がないわけじゃない。真っ先にあの義父と継母を血祭りにあげて馬鹿1号2号をあたしの奴隷にしてやる……ということを考えるに、サティラーン15世を食べるのはもっとせっぱつまってからでもいいやという気分になるのだ。

「乙女すまない、私がこのような姿であるばかりに……」

あたしがモンスターをひっくり返して有り金をあさっているのをみて、サティラーン15世は声を震わせる。その声が未だにどこから出ているのかよく分からないのだが、しかし戦闘が終わってあたしが金を探していると必ずこの王子様はそんなことを言うのだ。しかも微妙に声が震えている。

別にいいよ、とあたしは言った。巻き込まれたのは本当なので、厭になったらこいつを食って全部終わりにしてもいいのだから、サティラーン15世が考えているよりも実はあたしは楽天的に構えている。

しかしあたしの言葉にいたくサティラーン15世殿下は感激あそばしたようだった。ぶわーっと泡を吹いている。最近気付いたのだが、目を潤ませる代わりにサティラーン15世は泡を吹くようなのだ。あたしは溜息をついて言った。

「ちょっと、泡吹かないでよ」

泡を吹くとカニは不味くなる。最終手段の食料なのだから、大切にやらなくちゃ。ご禁制だの何だの、関係ない。森の中で一息に殺って、あとはミソまできれいに舐め尽くして甲羅を土に埋めてはいおしまい、だ。だがサティラーン15世はあたしの言葉を違うようにとっちらしい。乙女、と感極まったような声でふるふる震えだした。泣き上戸というか泡癖があるというか、もう鬱陶しいったらありゃしない。やめてよ、とあたしはもう一度言った。

「泡ばっかふいてないで、その辺の枯れ木でも拾ってきてよ。今夜はこのへんで野宿だからさ」

やっかい払いと雑用をかねて言いつけると、それを一体どうこね回してそんな解釈になったのか知らないが、サティラーン15世はまたふるふる泡を吹く。

「乙女はいつも前向きでひたむきで、とても強いのだな……余の身の回りにはそんな女性はおらなんだ。乙女、どうかこれからもよろしく頼む」

……こいつは根っから善人なのと単なる馬鹿と、一体どっちなんだろう。

この場合、あたしは顔が良ければ善人で普通以下は馬鹿と呼ぶことにしているが、なにせ相手はタラバガニである。この時点で本来は馬鹿と結論してもいいが、王子という肩書きに免じてや

ってもいいような、駄目なような。

あたしはあきれ半分で溜息になり、ありがとねと気のない返事をした。

「ああ、それとさあ、乙女ってのやめてよ。なんかさあ、小っ恥ずかしいんだよね」

正直、背中がかゆい。と、サティラーン15世は急にふわーっと甲羅を赤くした。最近はカニの喜怒哀楽が分かってくるようになった自分に、ほんのちょっぴりだが嫌気がさす。

「で、で、で、では、なんと呼んだらいいのか教えてもらえぬか」

.....何を照れてるんだ、この蟹は。あたしが眉をひそめると、カニはさらに赤くなりながら、では、と言った。

「では、『朝露の薔薇』とかはどうであろう？」

「.....はア？」

「で、では『勝利の輝乙女』は？」

「.....」

「ならば『麗しの蝶』などはどうだろう？ 他にも『微笑みの月』とか『誘いの虹』とか.....そうだ、私たちが出会ったのが夕暮れであったから、『黄昏の真珠』とか.....」

何故かサティラーン15世はもじもじとはさみをすり寄せて、照れを隠すのに必死である。その奇妙にきらきらゴージャスな名前にあたしはあっけにとられ、少しの時間をぽかんとして過ごした。が、乙女だけでもむず痒いっていうのに『黄昏の真珠』。冗談じゃない。あたしは長い長い溜息をついた。

「.....イーリス。名前はイーリスだから、そう呼んでよ。『黄昏の真珠』って呼んだら二度と口きいてやんないからね」

サティラーン15世は何故かますます照れ照れと足で土をひっかいていたが、やがてイーリスとあたしを呼んだ。何よ、と返事をするサティラーン15世はそわそわと甲羅をゆすりながら、はさみをあげてあたしの服の先をちょんちょんひっぱった。それはサティラーン15世があたしにかがんで欲しいという合図だ。仕方なくその場に座り込んだあたしの手をそうとつまみ、サティラーン15世は乙女イーリス、と言った。

「どうか余のことも、その.....お前の好きな名で呼んでくれまいか.....余は、余は.....そのう... ..イーリスと旅をするうちに、乙女の清純で強い輝きが我が心を夜明けの太陽のごとく照らすのを感じたのだ。既に余の心はそなたイーリスのもの。イーリスが望むのならばたとえこの世の果てに落ちているという真実の宝石でさえ手に入れよう。余は、余はそなたへの恋に囚われて日夜胸の痛みに身を焦がしておる。余はそなたの愛の奴隷、そなたの微笑みは幾千幾万の星よりも余の胸に輝き、そなたの吐息はどんな嵐よりも余の心を騒がせる。だがこの苦しみこそ恋の喜び、無上の切なさをどうか分かっておくれ、イーリス、我が麗き黄昏の真珠」

サティラーン15世はもう、茹で上がったみたいに真っ赤だ。芝居の台詞のようなことを一気にまくし立てられて、あたしも少しくらくらす。.....何言ってやがるのか、半分も分からねえよ.....

ただ一つ分かったことは、こいつが善人でも馬鹿でもないってことだったろう。

——こいつは、天然だ！

なんだか一匹で勝手に盛り上がっているサティラーン15世に、あたしは辟易しながらあのねえ、と言った。

「その変な名前と呼ぶのやめろってさっき言ったじゃんか。今度そんな名前と呼んだら本当に承知しないよ。分かった？」

「……うむ、余はイ、イーリスの言うことには従おうとも。そうだイーリス、代わりに余を好きなように呼んでくれまいか」

あたしは近所の犬がごろんと転がって腹をさらした姿をふと思い出した。あれは可愛がって欲しいときの仕草だ。あたしは溜息をついて言った。

「じゃ、サーちゃん」

考えるのも面倒くさい。だが、その適当な呼び名にも、サティラーン15世はぶるぶる甲羅をふるわせて感激している。

「イーリスと呼んだらサーちゃん……くふうん」

などと上機嫌に呟いて身をよじる姿にあたしはもうどうにでもなれという気持ちになり、スライムの有り金を探すのをやめて死骸をその辺の草むらに放り込んだ。仕掛けておいた罠にかかっているモンスターがいれば動けないところを滅多打ちで成敗しなくては。とりあえず森の中でかきあつめたキノコだの鳥の卵だので今は食いつないでいるが、肉が食べたい。盛大に肉が食べたい。そのためにはモンスターをこつこつ倒して金を貯め、まずナイフと顔を隠すための覆面を買って……

あたしが手順をもう一度頭の中で確かめていると、突然サティラーン15世が叫んだ。

「クレーロス！」

止める間もなくカサカサと横ばいでサティラーン15世が走っていく。エビカニに関わるものはご禁制で見つかったら死刑と決まっている。あたしはあわててその後を追った。

「ちょっと、サーちゃん！」

愛称とやらで呼びながら、あたしがサーちゃんに追い付くと、その目の前で魔法使いのローブを着た男がカニをすくいあげた所だった。フードで顔は見えないが、男だってことくらいならわかる。

「おお殿下、殿下、ようご無事でいらせられました……このクレーロス、殿下のご無事をどれだけ案じておりましたことか……！」

そのまま感極まってカニを抱きしめたまま、魔法使いはオイオイ泣き出す。ちょっと、とあたしはサーちゃんをかかえたまま感激に浸っている魔法使いの膝を足でつついた。

「あんた、誰？ サーちゃんの知り合い？」

用心はしなくてはいけない。一応これでも王国復興を目指す身なのだ。それにこいつが不審人物と分かったら容赦なく縛り上げてあらいざらい剥ぎ取るのが吉だろう。魔法使いの持っている杖や本は高く売れるのだ。

と、魔法使いの腕の中のサーちゃんがあたしにはさみを振った。

「これは以前話をしたであろう、宮廷魔術師のクレーロスというのだ。余の忠実なるしもべであるから、遠慮は要らぬぞ」

ああ、なんだかそんな話もあったような気もする。確かサーちゃんの味方だったような覚え

があって、あたしはふうん、と頷いた。

「クレーロス、この乙女は余を救ってくれた勇敢な女性だ。王国復興と余の呪いを解く手助けもしてくれるということになっておる」

.....サーちゃんの呪いを解くには乙女の真実の愛とかいうものが必要だと聞いた気がするのだが、それは一体どういう意味なのか。あたしが黙っていると、照れくさそうな声音でカニは付け加えた。

「何しろ我々は既に、サーちゃん・イーリスと呼び合う仲なのだ」

絶句したあたしの目の前で、そうですか、と魔法使いは頷き、そしてフードをとった。

「.....う.....っわー.....」

あたしは思わずごくりと息をのんだ。フードの下からでてきたのはまるで絵画の中から抜け出てきたような、正真正銘の美形だった。真っ白くてきめの細かい肌に真っ青な瞳、そしてサラサラの長い金髪。すっきりした目元と薄い唇は今まで見た中で一番の美形だ。これからも一番の美形であり続けるだろう。すごい.....か、かっこいい.....

「殿下をお助けくださり、また我々に力をお貸しくくださるとのこと、このクレーロス真実感謝申し上げます」

そう言ってクレーロスはサーちゃんをそっと地面に置き、膝をついてあたしの手の甲に口づけをした。あたしはぼうっとして、その手をさすった。クレーロスはふと唇をゆるめて笑った。その笑顔がまた、何ともいえないほど素敵だ。たまらん。こんなカニうっちゃっておいて、こいつと旅がしたい.....！あたしがごくと息をのむと、クレーロスは眉根を寄せてこちらを見上げてきた。とにかくどんな表情をしても撲殺されそうなほどの美形オーラがじんじん出ている。何もかもが絵になるのだ。

「ああ、いや、そのう.....」

あたしが言葉を探していると、クレーロスは淋しげに笑った。くうう、その顔がまた格別だ。「失礼をいたしました、姫君。私など殿下に比べればものの数にも入らぬ身、殿下の麗しきお姿と比較されるに甚だ恥じ入るばかりにございます」

「.....ちょっと待って。サーちゃ.....あの、サティラーン15世ってさ、美形.....なの？」

「ええ、国中で一番美しく凛々しいお姿でございました。今はあのにつつき魔女めの呪いでこのようなおいたわしいお姿に身をやつしてございますが」

何かを思いだしたのか、クレーロスの宝石みたいな目が潤んでぽろぽろと涙がこぼれる。あたしはサーちゃんにじっと視線をやり、クレーロスをまじまじと見つめた。

「あのさ.....例えばあんたとサーちゃんだったらどっちが美形だって言われてた？」

クレーロスはきょとんとした顔をし、ゆっくり首を振った。

「私など殿下の足元にも及びませぬ。何故なら.....」

「よせ、クレーロス」

カニが不意に言った。

「今の余はそのような賛辞を受けるに値せぬ.....呪いを解き元の姿に戻ったならば、その話も聞けようが」

そうでございますね、とクレーロスは悲しげに俯いた。またその顔があたしの心臓にどんぴしゃだ。

「ともかく、今後のことをご相談申し上げねばなりません。……乙女、どうかこれからもご協力くださいませぬか」

クレーロスの言葉にあたしはこくこく頷いた。こんな美形に頭下げられて厭だといえる女はいないだろう。……それに……

あたしはサーちゃんをちらっと見た。トンチキなカニの姿をしているが、これは王子だ。国王がおっ死んでるから、王子と言うよりは国王だ。しかも王妃も一緒に死んだってサーちゃんは言っていたから、小うるさい姑もいない。家付き、金付き、権力付きの王子様がもし本当にクレーロス以上の美形なら……

あたしはサーちゃんを拾い上げた。

「早くサーちゃんの呪いがとけるように頑張ろうねっ」

囁いたとき、腹の底から新たな気概がふつふつとこみ上げてくるのを感じてあたしはにやりと笑った。

——そして、救国伝説が始まる。

第3話 魔女の呪いは理不尽に

第3話 魔女の呪いは理不尽に

あたしが草むらをかき分けて出ていくと、旅人は悲鳴を上げて土下座した。

「これはこれは救国の聖女さま、ご機嫌麗しく……」

へっ、とあたしは笑う。最近はこの付近にあたしの存在が知れ渡ってきてるようで、手間がかからなくていい。

「ご機嫌？ あたしのご機嫌が麗しいかどうかはあんたの態度次第で決まるわね」

旅人の目の前すれすれに、この前通りすがりの騎士からもらった剣をどすっとばかりに突き立てる。そうすると旅人はますます恐れ入って荷物の中から財布をとりだした。あたしはそれを受け取って、簡単に中を確かめた。

「ちょっと。本当にこれだけでしょね？」

旅装の支度具合に比べて明らかに旅費が少ない。それだけです、と言われてあたしはふうんと呟いた。

「じゃあ、身体検査、しょうか。ほら立って、その場で飛ぶ！ 飛ベツつってんだよ！」

軽く跳躍させてみれば案の定、チャラチャラとコインの鳴る音がするじゃないか。あたしは剣の平で旅人の頬をぺたぺた叩きながら言った。

「は～い、この音は何ですか～」

観念した旅人の隠してあった財布をとり、あたしはその中から銀貨を1枚放り出した。

「とりあえず、それだけ残してやるからさっさと峠を下りてふもとの村へ帰んな。その金で自分の知り合いにでも手紙を書いて送金してもらうなりなんなりすれば？」

但しふもとの村へ行くには半分の確率でこの峠を通らなくては行けない。これは割合にいい稼ぎなのだ。向こうから大金しよった馬鹿がひよこひよこ上ってくるのだから。旅人を放免してやると、隠れていたクレーロスと彼に抱かれているサーちゃんが出てきた。相変わらずクレーロスの方は感激に身を震わせている。

「ああ乙女、あなたの力強い御言葉はなんと威厳に充ち満ちて人々をことごとく従わせることか！ 私には乙女が神の如くに麗しく眩しく思えてなりませぬ。素晴らしい、なんと素晴らしいのでしょうか……このクレーロス、心より感激しておりますとも！」

言いながらクレーロスの青い瞳はみるみる潤んでくる。こいつが泣き上戸だってことは最初の出会いの時に何となく分かったんだが、ここまで役立つだったって事は計算外だった。サーちゃんが最初、クレーロスと再会すればましになるとか何とか、言ってた気がしたのだが、この美形の魔術師は魔法のロッドがないと何にも出来ないのである。それを知ってあたしが心底がっくりしていると、クレーロスはいつものようにオイオイ泣きながらこう言ったのだった。

「おお朝日の如く鮮烈で夕暮れの如く優しく太陽の如くに凛々しくお強い勇氣ある乙女、私の口

ッドを取り戻して下され。あれがないと私は、私は……この数ならぬ身にて殿下にお仕えせんと思うて参りましたが、何のお役にも立てませぬ。殿下、どうかこの不甲斐ない私をお許し下さいませ……よよ」

何がよよ、だ！ 美形じゃなかったら絶対に顔の形変わるまで殴ってるところだ。しかもいちいち変なポーズをつけるのは何故。手をもみ絞ったり額に手を当てたり、胸を押さえたり、いちいちポーズをとらなきゃ口もきけんのかコイツ。

当初サーちゃんの『黄昏の真珠』に辟易したあたしだったが、クレーロスに会ってやっと分かったこともある。こいつもあたしのことを『勝利の大天使』などと呼びやがったのだが、どうやら王宮では妙齢の女性の名前はとても神聖なもので、それを与えるということは婚約したに等しい意味を持つんだそうで……あのタラバガニのド畜生め……

が、まあいい。見事魔女の呪いをといて王国を復活した暁には、あたしはクレーロス以上の美形だというサーちゃんと結婚して、この国の女王様になるのだから。それよか問題はサーちゃんとクレーロスという荷物を抱え込んだあたしの身の振り方だ。

あたしがとりあえずすべき事はサーちゃんの呪いをとくことなのだが、必須である『乙女の真実の愛』はそんな名前アイテムではなくて、文字通りそのままの意味らしい。それにあたしが眩暈を堪えていると、クレーロスはあたしが感激しているのだと思ったのか、うんうんと頷きながら言った。

「あなた様と殿下は既にサーちゃん・イーリスと呼び合う仲なのですから愛の真実はお二人の間にそびえる大樹の如くしっかりと根付いていること、このクレーロスははっきりと分かっておりますよ。殿下のお美しく偉大なる愛に包まれた乙女は私から拝見しましても眩しさのあまりにひれ伏したくなるような麗しさ。加えてその力強いご気性、何事も挫けぬ不屈の魂、誠に感服いたします。このクレーロス……」

あとは略していいだろうか。

しかし真実の愛がそんなに形式的なものとは知らなかったな、フン。

で、あたしはクレーロスの提案に従ってあの森の中でモンスターどもを手なづけ、奴らに人間をボコらせ、金と武器を奪って武装し、この峠にやってきたというわけだ。ここから王都までそう距離もないし、なんと言っても山岳地帯なのでいざとなればゲリラ戦に向いている。なにしろあちは騎士部隊を動かせるが、あたしの手足と来たらこのロッドがないと泣き言を延々抜かす以外に能のない顔だけが取り柄の魔術師と、それ以上に何も出来ないタラバガニなのだ。

あたしは旅人から奪った金をじゃらじゃら取り出し、クレーロスに渡した。

「じゃ、ふもとで煙草と食べ物買ってきて。あたし、肉。サーちゃんは？」

「余は小魚の煮干しを口にしたい」

「は、かしこまりまして承りましてございます。この山道を往く私の前にたとえ何がありましてもこのクレーロス……」

「分かったから早よ行け」

あたしはクレーロスの言葉を途中でちぎって奴を向かわせた。サーちゃんもクレーロスも、なんでこう勿体ぶった変な言葉を話すんだろうか。あれはあれで聞いていると苛々してくるのだが、サーちゃんは叩いたら物理的に壊れそうだし、クレーロスは……あの美形を殴るのはちょ

っと……だって本当にかっこいいんだったら……あれでもうちょっと役に立つ奴だったらなあ…
…あたしは遠い目をして、サーちゃんを拾い上げた。

「クレーロスが戻ってくるまで飯の支度でもしてよ、サーちゃん」

ばりばり稼ぎ働くのはあたしなので、生活一般のことはサーちゃんとクレーロスにやらせている。主にクレーロスは買い出し係でサーちゃんは炊事係だけど。何かの手違いでサーちゃんが焼けちゃったら、その時はその時だ。焼きタラバ……ふふ。

が、クレーロスはいつまで経っても帰ってこない。待ちながら一箱空にした煙草の箱を握りつぶし、あたしは遅い、と呟いた。サーちゃんが何かあったのだろうかと心配そうな声を出しているが、あたしはそれよりも苛立ちの方が優先だった。買い物も出来ないのか、あいつ……無惨なほどに何も出来ないな……

チッと舌打ちをしてさらにもう一箱煙草をあけていると、峠をのこのこあがってくる人影が見えた。二人連れだったから余分に金を持っているだろうとあたしは剣を構え、山道へ出た。

「おうおうちょっと待ちな！ あたしやこの辺に縄張り構えてる『救国の聖女』つーもんだけどね、活動資金を……」

言いかけてあたしは目をしばたいた。その二人連れはクレーロスと見知らぬ女だったのだ。クレーロスの方はなんだかしおれた花みたいにしゅんとしていて、美形は何をしても似合うなあとあたしは改めて感心…… い、いやそうじゃなくて。

「ちょっと、何してんの、クレーロス」

あたしの言葉に決まり悪そうに美形の魔術師は俯いて言った。

「おお麗しくも雄々しく凜々しい勝利の大天使、私の不手際をどうかおしかり下さいませ。思い起こせばあの運命の夜……」

クレーロスは身をよじりながらいつものように手を揉み絞ろうとしたが、その手は後ろ手になっているようでいつまで経っても揉み絞れそうになかった。クレーロスの後ろで女がニヤニヤ笑っている。

「とっ捕まったな……」

何も出来ないだけならまじだったかもしれん。もしかしたらサーちゃんだけの方が足手まといじゃないのでは……？

あたしは長く溜息をついて、女を見た。年は……これがスゴイ厚化粧でよく分からないんだが、えーと30くらい……かな？ 色彩感覚が狂っているとしか言いようのない化粧をしている。小豆色の口紅に普通紫のラメのシャドウと緑のチークを合わせるか？ いやその前に、その黒いエナメル生地のパツツンパツツンの露出度だけに配慮したような衣装はどうよ。スカートなんか膝上15センチってところだろうか。こいつとは絶対に価値観が合わないと確信し、あたしは女に向き直った。

「あんた、誰」

あたしが言うと、女はニタリと笑った。

「あたくし？ あーらあたくしを知らないなんてどんな世間知らずなのかしら！ いいこと、あたくしは偉大なる魔女にしてこの世の叡智と奇跡を司るべき運命の元に生まれた美女！ その名

も『導きの星』とお呼び！ おーっほっほっほ！」

……王宮に出入りしている奴らはみんなこんななのだろうか。あたしが女王になったら真っ先にこの風習からどうにかしてやりたい。さりげなく自分のことを美女と紹介するところも気に入らないが。

「この峠に『救国の聖女』とかいう追い剥ぎが出るって苦情がきてるから退治しにきてみれば、クレーロスがいるじゃないの。すぐにサティ様がいらっしゃるって分かったわ、なんて素晴らしいあたくしの推理力！ 人類の知性を一手に引き受けたような魔女としてこれくらい当然ですけどね、おーっほっほっほ！」

あたしははいはい、と合の手を入れてから言った。

「えーっと、職業は魔女ね。で、それは分かったから、名前は」

「だから『導きの星』！」

「『導きの星』！ クレーロスを離せ！」

女が叫ぶのとサーちゃんが怒鳴るのが殆ど同時だった。カサカサとサーちゃんが草をかき分けて出てきて、そなた、と震える声で言った。甲羅が赤い。サーちゃんは怒っているらしい。カニの喜怒哀楽が分かるって、本当に嫌なもんだ。

サーちゃんはハサミを振り回しながら叫んだ。

「この憎き魔女め！ 私を愛する乙女は既にここにおるぞ、そなたの野望は水泡の夢と化すに決まっておる！ さあ、余の呪いを解くのだ『導きの星』！」

「ああサーちゃんこの人知り合いなんだ？」

あたしは剣の平で肩を叩きながら言った。知り合いだったら丁度いいからクレーロス引き取ってもらえないかな……サーちゃんの方が美形だって言うし、大体買い物に出してとっ捕まったんじゃない。いっそこいついない方がどれだけ楽だろうか。

が、サーちゃんとはんでもないというように、ぶんぶんとハサミを振った。

「何を言うのだイーリス、我が乙女、この女こそ余に呪いをかけ王国を滅亡に導いた悪しき魔女であるぞ！」

ふ〜ん。この変な化粧と衣装の女がねえ……あたしはフフンと笑った。何となく、勝った。何がどう、というよりもこの女には勝ってる。と、魔女はいきなり目をむいてあたしの胸ぐらを掴んだ。

「ちょっとあんた！ 王子に本名で呼ばれてんの？！」

「それがなによ」

聞き返すと魔女はあたしをひつつかんでいた手を離し、その場にへたへたと座り込んだ。

「そんな……そんなことが……ああ〜超絶格別ウルトラ美青年の呼び声高いサティラーン15世殿下をタラバガニに変えてあたくしの愛の力で甦らせた暁にはあたくしの崇高な愛も成就してサティ様と二人で愛の女神の導くままあたくしがサティさまと呼んだらマガ我が麗しの乙女と優しくお返事下さるようなそんな甘甘新婚生活に突入するというこのあたくしの史上に残る完全完璧空前絶後の計画が、史上に残る無様さで！」

何で王宮から来る奴ってこう、複数行に渡って喋るんだらうな。形容詞がくどいっていか。クレーロスと同じような泣き方で、この女はぎゃあぎゃあ泣いている。

が、分かることもあった。多分コイツ馬鹿だ。

「ところでマガ？」

魔女はぱっと顔を上げた。あ～あ～、泣いたからマスカラ落ちちゃってるよ……

「ど、どうしてあたくしの真の名を？」

「さあ、どうしてだと思う？ あたしはあんたが思ってるよりもずっと賢いんだよ。サーちゃんはあたしのもんだから、あんたは諦めてさっさと呪いを解きな、オバサン」

「お、オバサンですって?!」

マガはわなわなと震えだした。

「よ、よ、よくも……よくもあたくしに……無礼な小娘め！ な、なによ、つるっぺたのくせに！」

つるっぺた。あたしは呟き、じっと自分の胸を見下ろした。そりゃ確かにこのスリムでスレンダーな身体は……ちょっとばかり凹凸が少ないけど……でも……つるっぺた……つる……

ぶちっと切れた音がこめかみでした。あたしは手にした剣を魔女に振り下ろした。魔女がふわっと後ろへ下がる。クレーロス突き飛ばしてあたしは魔女に突進した。

「テメェ死ねやゴラァ！ 人の気にしてることを！ オウオウ手間取らせんじゃねーよ！ 死ね！ 死ね死ね死ね死ね死ね！ 死んであたしに詫びろ、大年増！」

叫んであたしはめちゃくちゃに剣を振り回した。その内の一撃がやっとな魔女の胴に食い込む。

——が、それは空気を切るようにすうっと手応えなく、通過した。あたしははっと手元を見る。マガは口元に手をやって甲高く笑った。

「おーっほっほほ、このあたくしに聖剣以外の攻撃は効かなくてよ！」

「よし分かった、聖剣見つけだして必ずお前を退治してくれるからな！」

「ど、どうして聖剣のことを知っているの?!」

多分じゃなくて真性の馬鹿だな、こいつ。あたしはにやりと笑って叫んだ。

「あたしが救国の聖女でサーちゃんの婚約者だからだ！ 愛の力！ 分かったかこのババァ！」

マガはうなり声をあげてじたばたと地団駄を踏み、そしてじゃあいいわよ、とあたしに指を突きつけて叫んだ。

「あたくしと勝負よ、『救国の聖女』！ 聖剣を見つけたし見事このあたくしを倒したらサティ様の呪いを解いて、カルロ王国の兵を引き上げさせる。その代わりあたくしを倒せなかったらサティ様の心はあたくしのものですからね！」

「あのーもしもし、余の心はやり取りできる種類のものではないと……」

「よし、その賭け乗った！」

あたしは何か言いかけたサーちゃんを拾い上げ、甲羅をむんずと掴んでマガの前に突きだした。

「お前が勝ったらこのタラバ、煮るなり焼くなり好きにしな！」

きゃっ、と変な声を上げてマガが両手で顔を隠した。サーちゃんがばたばたもがいている。…
…何照れてんだよ、こいつらは……つーか、カニが照れていることを分かる自分が本当に嫌だ…

…

城で待っているわ、と捨て台詞を残してマガは走り去ろうとした。と、ハイヒールがつかかって派手にばった一んと転ぶ。思わずというように振り返ったクレーロスと、あたしが掴んだままだったサーちゃんが同時に呟いた。

「ピンク……」

マガはさっと起き上がり、泣きそうな顔であたしをにらんだ。転んだのは勝手なのだがあたしのせいにしたいらしい。あたしは中指を立ててマガに叫んだ。

「さっさと帰って命乞いの練習でもしときな、クソババァ！」

ババァ、とマガはぐうっと顔を歪め、あたしに吠えた。

「そっちこそ土下座の訓練でもなさい、この貧乳娘！」

ひ、ひんにゅ…… あたしは絶対にマガを許さないと決めた。この瞬間に決めた。

「でかけりゃいいってもんじゃないのよ！」

吠えたとマガはいつものように高笑いして、駆け去っていった。50歩進むごとにハイヒールのせいで転ぶのが壮観だった。魔法で飛んでいけば楽なのに、やっぱりあいつ馬鹿だ。あたしは剣を握りしめ、長い長い溜息をついた。

「聖剣ね……」

乙女の真実の愛とやらが存在するなら、それもきっとあるだろう。イーリス、と呼ぶ声であたしは掴んだままのサーちゃんと向き合った。腹側の方を見ると奇妙に身もだえして

「まだ結婚前だから、ま、まずいと思うのだが……」

などと呟いているのは一体どういう意味か。

あたしがサーちゃんをかかえ直すと、サーちゃんはやっと心地がついたようにハサミを振り振り言った。

「かの魔女はすさまじく悪知恵が働くのだ。イーリス、余のことはよいから御身大切にな……イーリスの身に何かあったら余は、余は……」

微かにサーちゃんは泡を吹いた。大丈夫、とあたしは深く頷く。大丈夫、マガ、あいつ馬鹿だから。

あたしはふっと笑い、待っている、と呟いた。マガだけは何があっても許さない。聖剣を手に入れてメタメタのボロボロにしてくれる。大丈夫、とあたしはサーちゃんに強く言った。

「必ず聖剣を手に入れて、あの憎っくき魔女をぶちのめしてみせるわ」

——そして、伝説は甦る。

第4話 伝説の剣は激安に

第4話 伝説の剣は激安に

.....本当に、ここでいいのだろうか。 あたしは遠く霞む王国大聖堂とやらの視線をくれ、首を傾げた。聖剣でないとマガをぶちのめせないのだから手に入れる必要はあるんだが.....

「ちょっと。本当の本当に、ここでいいの？」

あたしは横に突っ立って大聖堂に感激しているクレーロスのすねを足でつついた。全くこいつは何かあるとことごとく感動の涙を流してやがる。が、またその涙にくれた顔がいいんだから美形って得だ。というか、こいつが美形じゃなかったらこんな役立たず、さっさとマガに押しつけてる。

クレーロスはいはい、と深く頷いた。

「もちろんでございますとも、我々の光と勝利の天使、麗しの乙女。語れば長くなる事ながら.....」

「その先はいらんから、とっとと案内しろ」

クレーロスは語りを邪魔されてちょっとばかり淋しそうな顔をしたが、すぐに頷いて歩き出した.....沿道を埋め尽くす、土産物屋の通りの中へ。

『伝説の剣あります』

という看板がそこかしこの店に出ているのは一体何なのだろうとは思いますが、あの大聖堂とかいうのが王国の英霊の宿る場所なのは本当らしい。

サーちゃんが

『祖先の偉大なる王と王妃の面前にて、このような姿、恥ずかしくてとても出て歩けぬ.....ああ、余は、余は』

などと泡を吹き散らしてわめいたあげく、あたしの荷物の中に潜り込んで出てこようとしない。

ここまで来れば王都も近いし、用心するに越したことはないからそれでも構わないのだが、クレーロスはサーちゃんのことを不憫がって例によって長々と手を揉みしぼりながら語り、泣く。サーちゃんはそれに更に感激して泡を吹く。蟹は泡を吹くと不味くなる。なるべくこいつを興奮させないで置こうとあたしは思うのだが、サーちゃんもクレーロスもあたしを豪快に放り出したままで、自分の感傷にどっぷり浸かる癖があるのだ。あたしが雑踏を不機嫌に歩いていると、店の呼び込みが聞こえてくる。

「さあさあ見てって！ 伝説の剣エクスカリパーに最強の鎧だよ！ サイズもどーんと豊富に格安販売！ ——ほら、そこのお嬢さん、ねえ、剣はどう？ 建国記念の聖剣に今ならお嬢さんのお名前を彫っちゃうサービス付き！」

にっこり笑った店の親爺があたしに剣をぶんぶん振ってみせた。何が聖剣だ、普通の両刃剣じゃないか。白けたあたしの表情に親爺は更に満面の笑みで盾を振りかざしてみせる。それらしく

ごたごたと飾り付けて作ってあるが、持ってみると異様に軽い。ふっと裏返してみるとベニヤ板だった。あたしは沈黙し、盾を親爺に突っ返して歩き始めた。クレーロスが慌てて小走りについてくる。

「……ちょっと、聖剣ってあんなのなわけ？ あれでいいの、ほんとに」

あたしがクレーロスを睨むと、金髪碧眼の美形魔術師はとんでもない、と首を振った。

「あんなのはいけません。乙女にふさわしい剣はもっと他にございますとも。朝露に光る薔薇の如く美しく……（中略）……あなたのために剣を必ず、必ず……（中略）……手に入れてごらんに見せますとも！」

何故こいつはいちいち泣くんだろうなといつも思うのだが、あたしはそれには構わずにずんずん先へ進んだ。聖剣は大聖堂にある、と聞いてやってきたのはいいのだが、来てみれば聖剣と名の付く剣は周辺の土産物屋で3本5ゴールドでたたき売られているじゃないか。サービス合戦も過激になってるようで、名前を彫ってくれるとか、当たりが出たらもう1本だとか、抗菌まないた付きとか、色々だ。一刻も早く剣をどうにかしてマガをぶちのめしてやりたいが、大量の聖剣の前に何故だか段々やる気が失せてくる。

長い溜息をついてクレーロスの言うままに歩いていたあたしは、彼が連れて行った店の前で更にふてくされた。

「……何よ、『激安王』ってさ……」

今まで見てきた土産物屋の集大成のようないかがわしさだけは満点な店だった。いい品をどんどん安く！ 3割4割は当たり前！ という旗がぱたぱたはためいている。呆れかえってクレーロスを見ると、彼はにこにこ笑っていた。

「ここが一番安いのです、乙女。1年間の保証と5年間の保険もついてますし、買って1週間以内の交換にも応じてくれますし、お名前まで彫ってくれるんですよ」

「あーあー、そうですか」

結局『乙女の真実の愛』とやらが形式を満たしていれば満了することと一緒にのだ。——だったら、何もわざわざこんな王国大聖堂なんかに寄らなくたってその辺で適当に買った剣に名前書いて『聖剣』って言えばいいんじゃないか！あたしがそういうと、クレーロスはきょとんと目をしばたいた。と、その青い瞳に見る見る涙が吹き上がってくる。しばらく一緒に旅をしているから、これが何であるか何となく分かる自分が嫌だ。……クレーロスは感動しているのだ。

「す、素晴らしいです、乙女！（以下略）」

本当にこいつらと来たら……あのタラバガニはそもそもご禁制になっているので危なっかしくて人前に出せないし、クレーロスは天然醸造ものだ。クレーロスのことをサーちゃんは優秀な魔術師と言ったけど、マガのことを『恐ろしく悪知恵が回る』などと言ってることからして、推して知るべし。

むっつりとあたしが黙り込んでいるのを気にしたのか、クレーロスはあたしの方をのぞき込んで何くれと気をかけてくれるが、そんなことをするくらいならもっと役に立ってくれというのが本音だ。が、いつまでもふて腐れていても仕方がない。聖剣を手に入れてマガを成敗し、サーちゃんと結婚してクレーロスをはべらせるといふ夢の生活まであと少しなのだ。ここまで来た時間

も無駄にしたいくない一心で、あたしはクレーロスがおすすめとかいう『激安王』へ歩いていった——が、その前で兵士が荷物の検査をしている。

荷物の中にはサーちゃんが入っているはずなので、見とがめられたらマズい。

「ど、ど、どういたしましょう……ああこのクレーロスにもっと力があれば（以下略）」

おろおろするクレーロスの言葉を適当に聞き流し、あたしは荷物の中に手を突っ込んで財布だけとりだした。サーちゃんにはおとなしくしてろと言ひ含め、あたしは沿道の土産物屋に入る。

「いらっしゃいませ！」

早速店の親爺が飛んでくる。あたしは荷物を付きだして、預かってちょうだい、といった。途端に態度が渋くなるが、こんな時にどうすればいいのかあたしは勿論知っている。

「お前、『救国の聖女』に刃向かったら命はないと思え」

腹の底から絞り出すような低い声で言うと、親爺は竦み上がって頷いた。峠で追い剥ぎ家業をしていた頃の名前は王国中に知れ渡っているのだ。

荷物を渡してあたしは親爺に念を押し、クレーロスをつれて『激安王』へと向かった。店の前で荷物の検査をしていた兵士はあたしをじろじろとみ、そしてあたしの胸のあたりを見た。ぎろっとにらむと慌てて視線を逸らす。マガに罵られて以来、こっそり買った水流バスタップマッサージ器『女神の豊穡』で日々鍛えているのだが……そ、そんなに大きくなったかな？ いやべつに、胸の大きさなんてぜーんぜん、気にしてないけどな。うん、全く気にしてない。気になんかしてないぞ。だが乳は育っても胸の傷は癒えない。マガのクソ野郎に正義の鉄槌を加えてやるためにも、あとちょっとだ。

『激安王』は中は以外に普通の武器防具屋だった。1本1ゴールドの中古品から200万ゴールドの超高級品までであるが、高級品の方はどう見ても剣そのものの値段じゃなくてたっぷり使われた金や宝石の値段だと思うのだがどうだろうか。

クレーロスは楽しそうに物色していたが、やがて1本の剣を選び出した。

「これなんかどうでしょう、乙女……長さも軽さも丁度いいかと思うのですが」

この剣と今まであたしが使ってきた剣の違いがどこにあるのかさっぱり分からないのだが、クレーロスはにこにこ笑ってこれにしましょうと力説する。何がいいのか悪いのか全然分からないまま、会計をして貰おうと店員を探して店内を見回すと……魔法のロッドコーナーがあるじゃないか。

「ちょっとクレーロス、あんたのロッドも買いなさいよ」

こいつが全く役に立たないのは魔法のロッドがないから……らしい。本当にロッドがあれば役に立つのかどうか実に怪しいが、買えるものならそうしてやって、すこしでも楽が出来ればありがたかった。

「えっ、よ、よろしいのですか？」

「いいわよ。ほら、好きな選んで」

あたしが促すとクレーロスはいきなりほろほろと泣き始めた。……またかよ……

「ああ乙女、なんとお優しい方なのでしょう……このクレーロス、乙女の凛々しく強い魂とお優しさに触れるたびに、改めて感激いたします……殿下が乙女にお心をお預けになるのもようく

、よく分かります。殿下のお声がかからなければこのわたくしめが乙女に愛をお捧げするものなのですが……」

あたしは首をひねり、ちょっと、とクレーロスの袖を引いた。

「それはあたしが好きってこと？」

こいつらの物言いは勿体ぶっている上に修飾詞が長くて訳が分からない。肝心なことはいちいち聞き返さなくてははいけなかったが、クレーロスは確かに愛を捧げると言ったような気がする。

あたしの質問にクレーロスは茹でた蟹みたいに真っ赤になった。両手で頬を押さえて心というものには口に出さずとも伝わるのですねなどと呟いている。今お前が自分でそういったんじゃないかとは思っているものの、いちいち突っ込むのさえ面倒なほど、こいつもサーちゃんも頭のねじがちょっとゆるいのだ。勿論、一番ユルいのはマガだけだ！

「しかし、殿下があのようなお姿であられるからこそ乙女はわたくしのようなつまらぬ者にもお目をかけて下さるのだと、このクレーロス、肝に銘じております……私などは殿下に比べて何もかもが劣る、不肖の弟なれば……」

「ちょっとクレーロス、あんた、サーちゃんの弟なの？」

「ど、どうしてご存じなのですか？」

マガといいこいつといい、どうして王宮から来るやつってのは……

あたしは溜息をついた。こいつやマガと喋った後でサーちゃんのことを考えるに、奴がひょうきんな蟹の姿はしていてもしっかりした奴であったように思えてくる。……それはもちろん錯覚なんだけど。

「……今は亡き国王陛下の脇に出来た子でして。でも王妃様にも可愛がっていただきましたし、殿下にもよくしていただきましたから……」

クレーロスはひたすら遠い目をして語っている。脳天気な奴らばかりだと思っていたが、王宮もそれなりに色々あるらしい。が、あたしが気になるのはもっと別のことだった。

「ところであんたとサーちゃんって似てた？」

クレーロスはそうですねえと曖昧に頷いた。そもそもこのクレーロスが極上の美形だ。さらさらした長い金髪、きらきらした青い瞳に長い睫毛、通って細い鼻筋、柔らかそうで薄すぎない唇、白い歯。たまんねえ。これに似ているというならサーちゃんは確かに相当の美形だ。クレーロスは自分よりももっとサーちゃんの方がお美しいとか何とか、だらだら語っていたが、見ないものは信じない。サーちゃんの美形ぶりというのはクレーロスの話に聞くだけだったから、マガをぶち倒した後でゆっくり観賞するに限るが、何にしろサーちゃんを元に戻すにはマガを倒さねばならず、マガを倒すには聖剣がいる。

その手助けになるならクレーロスに多少の投資はしてもいい。

「ま、細かいことは後でゆっくり聞くからロッド買いな」

クレーロスはそこでひとしきり泣きかぶって繰り言を述べていたが、あたしはそれを大半聞き流し、ロッドのコーナーへ引っ張っていく。ロッドを適当に物色して選び出した後、クレーロスは真っ赤になりながら乙女、とあたしに囁いた。

「あの……あのう、このロッドなんですけど、心の中で乙女のお名前でお呼びしてもよろしいでしょうか……」

心の中でなんて呼んでようが聞こえない分なら自由だろうとは思いますが、もうこいつらのこんな習性には慣れてきている。あたしははいはい、と軽く頷いた。クレーロスの顔がぱっと明るくなり、あたしに向かって満面で笑って見せた。

「ありがとうございます、ありがとうございます、ああ、乙女、貴方はなんと良い方なのでしよう！」

本当はお前の方がいい奴なんだけどあたしは胸の中で呟いた。

剣とロッドを会計に持っていくと、店員があたしを見て、あたしの胸を見た。そんなにはたけに分かるほど育ったのだろうか、すごいぞ、『女神の豊穡』———とっていたら、店員があつ、と小さく言った。

「あの、お客様、こちらでちょっと胸囲を測らせてもらえないでしょうか……」

あたしがじろりとにらむと、店員は首をすくめて申し訳ありませんが、と続けた。

「先週から新しい法律が急に出来まして……その、女性のお客さまについては、その、75A以下の方には、剣をお売りできないことに……」

「何よその法律……」

「はあ、私どもも訳が分からないんですが、とにかく占領軍の方からきつく申し渡されておりまして……」

それで武器屋に入る時に兵士どもがあたしの胸をじろじろ見ていたのだと気づき、あたしは喉を鳴らして唸った。

これが何であるか考えなくてもいい。怒りで目の前が霞んでくる。

マ~~~~~ガ~~~~~！！ 絶対殺す、あの女。

あたしは持っていた剣をクレーロスに押しつけた。

「ちょっと、ここにいて」

「え？ でも乙女、どこへ行かれるのです？」

「いいからここにいて」

あたしはクレーロスに言いつけると、サーちゃんを預けっぱなしの土産物屋へ戻った。親爺がほっとしたように荷物を出そうとするのに首を振り、店頭で売られている蒸かし饅頭をとる。何か言いかけた親爺に向かって1ゴールド硬貨をたたきつけ、あたしは饅頭をふたつ服の中に押し込んだ。適当に形を整えて『激安王』へ戻り、難なく審査をパスしたのがまた屈辱的だ。

「あのう、そ、その胸はどうなさったんでしょうか……」

剣を手に入れて『激安王』を出ると、さすがにクレーロスの方は心配そうにあたしを見つめてくる。あたしはだまって胸から蒸かし饅頭を取り出した。途端、クレーロスの目に涙が浮かんでくる。

「おお乙女、なんとおいたわしい！」

「お前に言われたかないわ！」

自分で分かっていることを同情されると、本当に腹が立つ。とりあえず、『女神の豊穡』がクズだって事はよく分かった。

マガ、とあたしは『イーリス、勝利の大天使』と彫られた聖剣を握りしめて胸に誓った。あの

低能な魔女をこの聖剣で滅多切りにしてくれる。乙女心を傷つけた罪は象より重いのだ。

「サーちゃんを迎えに行って、さっさと城へ乗り込むわよ」

あたしは呟いて、にやりと笑った。

——かくて聖女は光臨する。

第5話 決起の声は高らかに

第5話 決起の声は高らかに

辿り着いた都は……なんだか想像と違ってた。あたしの空想ではもっと小綺麗な街だと思ったんだが……都の清流ランシード川とかいうのは藻色のドブ川だし、街路樹の下には犬の糞だらけだし。おまけに占領軍とかいう連中がぶっそうな目つきでうろうろしている。ま、こいつらのおかげで食うのに困らないからいいんだけど。

あたしは『イーリス、勝利の大天使』と彫られた聖剣とかいうナマクラをひっさげて、ちょうど歩いてきた奴らの前へ出た。

「おいお前ら、この辺があたしのシマだって分かって通ってんだらうな？」

あたしがドス声を作っていると、占領軍の制服を着た連中が一斉に悲鳴になった。

「うわっ、『救国の聖女』！」

ふふん、あたしも有名になったもんだ。あたしはおう、と聖剣を石畳にがつつん突き立てて怒鳴った。

「ホラ通行料！」

連中が怯えたように差し出す財布を取り上げ、あたしは背後に放り投げる。クレーロスがさっと近寄ってきて、中身を数えた。

「全部で53ゴールドです、乙女」

「けっ、少ねえな」

あたしが呟くと連中は震えいって平伏し、お許し下さい聖女様、と怒鳴った。あたしはそれに構わず一番若そうな男の腰についていた袋をこじあける。

「まだあるじゃねえか、30ゴールド」

「そ、それは田舎の母に送る薬代で……」

「悪いね、あたしも田舎に病気の姉貴どもがいるんだよ」

但し奴らの病気はオツムの部分で一生直らないがナ。あたしは胸の中でその部分だけを呟き、新しい獲得金を自分の懐に入れた。

ふっふっふ、これでパーティ用のドレスを作ろうっと。とにかく都まで来たんだし、王宮は目の前だし、あの低能魔女マガをぶちのめす日も近い。即ちそれは、あたしがサーちゃんと結婚してこの国の女王になる日だ。流行の髪型にして、可愛くドレスアップして、むふう。あたしは思わず頬をゆるめる。カル口王国の連中はその顔を見て逃げていったが、あんなの気にしない。

また足音がしたのであたしは聖剣を構え直して振り返った……が、そこにいたのは若い男だった。銀色の鎧と大きな剣。けれど胸に付いている紋章はどうやらこの国の騎士団のものらしい。占領軍とは違うことくらいなら分かる。

「あの、『救国の聖女』さまでいらっしゃいますよね？」

「そうだけど、なんか用？」

あたしをナンパするとは見る目がある奴……と思っていたら、そいつはあたしにいきなり膝をついた。

「我々はこの都をお守りしていたシスドーン騎士団の者でございます。救国の崇高な目的のため身を犠牲にしてくださる聖女様の魂に我々は共感いたしました！ とりあえず先の戦で残った者どもを聖女様の御為にと密かに結集いたしました！ どうか我々の元へ来て下さいませんか！」

そして泣き出す。堅物なことをほざいているなと思っていたのだが、まったく都の連中と来たらどうなってるんだ。こんな馬鹿は王宮のネジゆる組だけだと思っていたのに、どうやら都は騎士団にいたるまでアホばっからしい。

が、まあ人数がいるっていうのは良かった。王宮にもちょっと行ってみたのだが、結構城門も厚そうだし警備も頑丈で、骨が折れそうだったのだ。アホでも馬鹿でもちゃんと集まっている手勢がいるなら楽だ。それに敵だったら全員この聖剣で滅多切りにして、その後で金目のものを貰ってくるだけだし。

「クレーロス、行くよ」

あたしが振り返って言うと、騎士はまた目をうるうるさせながら叫んだ。

「おお、宮廷一の賢者、お世継ぎ殿下の守り刀、叡智の塊であるところのクレーロス魔術師では？！ さすが聖女様、お連れになっているかたも桁が違う！」

叡智のカタマリ……叡智というのがどういう意味だったのか、本気で悩みそうになる。が、クレーロスの方は至極当然というように頷いた。

「私も乙女の（中略）魅力に打ちのめされて愛のために奴隷になったのです。私たちの素晴らしく（中略）勇気ある同志。さあ、一緒に王国を復興させるのです！」

「クレーロス様……！」

感極まったように騎士が号泣し始める。こいつらの泣き属性には慣れているのだが、いい加減にうざったくてあたしはクレーロスの膝を蹴った。

「泣くな！ うざったい！ 泣いてる暇があったらさっさと仲間の所へ案内しな！」

「おお乙女、以前からこのクレーロス思っておりましたけれど、乙女はなんと冷静で（中略）素晴らしいお方なのでしょう！」

……もうこいつら殺してサーちゃん食って全部終わりにしたい気持ちになってきた……あたしが黙っていると、騎士とクレーロスはひたすら涙を噴きこぼしながら盛り上がるばかりだった。なんていうのか、感性が違う。

それでも奴らの繰り言を聞き流して連中の根城だとかいうホテルへ行ってみれば、そこその人数がいた。武装してるってのも大きい。というか、今までのクレーロスやサーちゃんが役に立たなさすぎなのだが。ロッドを買ってやった方がいいが、クレーロスの得意な魔法は花壇の花を咲かせることなんだそうだ……お前は一生花でも咲かせてろ。

「皆の者、この方こそ我々の希望の輝きにして栄光の導き手、勝利の大天使なる救国の聖女さまであるぞ！」

紹介されて巻き起こる、万歳三唱。なんだか事態はあたしの知らないところでちゃんと進行し

てるらしい。そんな風に楽観していたあたしに、万歳を終えた連中は期待に充ち満ちた、ある意味雨の日に捨てられている子犬よりも卑屈で始末が悪い目つきであたしを見た。

「それで救国の聖女さま、これからどうしましょう？」

そんなの自分たちで考えとけよ！

つつい怒鳴りそうになるが、そんなことしたって無駄だってことくらいあたしだって学習している。……ていうか、連中の頭は一体何のためについてるんだ。クレーロスくらいのレベルになると観賞用でも別にいいんだが、ごく普通の連中の雁首並べられたって、面白くも何ともない。あたしがあんなたち、と声を上げようとした側からクレーロスが乙女、と潤んだ声で言った。

「殿下を今こそ掲げて城に戻りましょうねっ、ねっ」

「あ、そっか」

都に入ってから特に甲殻類チェックが厳しかったんで、サーちゃんは荷物の中に入れっぱなしだった。あたしは足元の鞆をあけて、サーちゃんの甲羅を掴んで引きずり出した。

「どーだ！ あんなたちの王子……よ！ あたしが掴まえてここまで連れてきてやったんだから！」

一瞬サーちゃんの名前が出てこないが、連中にわかるもんか。が、連中の反応はとっても微妙だった。ざわざわという空気が少しだけ流れ、更に変な沈黙になる。何よ、とあたしが怒鳴るとさっきあたしをナンパした騎士があのを、と言い辛そうに言った。

「そ、そのタラバガニが麗しき都の（中略）サティーラン15世陛下だと乙女はおっしゃいますのでしょうか……？」

「……た、タラバ……いや、カニ、なんだけどさあ……」

「だーかーら！ 余はカニではないと言っておろう！」

泡を吹いて主張するサーちゃんにあたしはでもさあ、と呟いてくりっとひっくり返し、腹側を自分に向けた。何となく、こっちの方が話してる気持ちになる。

と、それを横からクレーロスがひったくり、サーちゃんをかかえていけませんっ、と叫んだ。とびきり綺麗な白い頬までぱあっと染めてサーちゃんを胸に抱き締めるクレーロスという、腐女子ならウツカリ萌えそうな光景だ。

「ダメっ、ダメです乙女！ そんな、け、結婚前に……！ いくらお二人が真実の（中略）愛の嵐に（中略）おられても、その、節度というか、貞操といえますか……」

あとは顔を赤らめちゃって、口の中でもごもごと呟いている。こいつときたら説教も出来ないらしい。残酷なまでに本当に何も出来ないんだな、クレーロスって…… あたしが鼻白んでむっと突っ立っていると、クレーロスは胸に抱えたサーちゃんの甲羅を撫でながら、みなさん、とよく通る声で言った。こんな時はやっぱ美形に限る。

「お姿はこのようなおいたわしいこととなっておりますが、この方は紛れもなく（中略）王子殿下……いえ、今やこの国の王陛下であらせられる、都の宝石にして（中略）サティーラン15世陛下ですぞ！」

おおっというどよめきがして、次の瞬間、騎士団の連中が全員膝をついた。

「そ、そういえば確かにその澄んだ（中略）お声は陛下のものでございます！ これは知らぬ事

とはいえ、陛下になんという（中略）ご無礼を！」

そのまま全員が泣き伏す……まったく、こんなだからカルロ王国にあっさりやられちゃうんだろうな。脳がユルイと全てがユルイらしい。天然の王子、アホの宮廷魔術師、バカの騎士団。そりゃ無理ってもんだ。

「もうよい、みな、余のためにこれからよく働き、余と余の乙女イーリスの作る新しい国を支えておくれ」

サーちゃん言葉に騎士団の連中はおいおいと声を上げて泣いている。と、そのうち一人が聖女さま、と手を挙げた。何よ、とあごをしゃくると頬を染めて上目遣いにあたしを見た。

「あのう、救国の聖女さまは、陛下の……そのう、魂と魂が固く結びついた真実の愛の具現の女神さまでございますか？」

「……は？」

あたしは思い切り鼻に皺を寄せた。こいつらときたら何でこう、もうちょっとましというか簡潔な表現が出来ないんだろうと苛々考えていると、騎士はざあっと青くなって申し訳ありませんと平伏した。

「申し訳ありません申し訳ありません聖女さま！ ワタクシの貧弱な語彙では愛の何たるかを表現出来ず、こんなに短く品のない言葉でお聞きしましたこと万死に値いたします！ この際は死んでお詫びを……！」

さっと騎士が剣を抜いた瞬間、サーちゃんならぬ、と一喝した。

「乙女はそんな（中略）ことを気にするような者ではない！ 余のイーリスはとても（中略）優しいのだ……くふふふうん」

最後の喘ぎも気になるが、それよか所有格の方が気になる……いつのまにこんなに増長しやがったんだろうな、このタラバガニのバカやろう。何か一言言ってやろうとあたしはあのねえサーちゃん、と言いかけた。と、それよりも騎士たちの歓声の方が大きくて早い。

「サティーラン15世陛下とその優しくお美しい王妃さまに、ばんざーい！ ばんざーい！ ばんざーい！！」

全員が揃って万歳を始めて、あたしはもうどうにでもなれという気持ちで立ちつくした。サーちゃんは口から泡を吹きながらありがとうとしか言わないし……クレーロスをちらっと見るとこいつもご多分に漏れず号泣中だったのだが、あたしが買ってやった例の魔法ロッドをさっと一振りし、花束を出した。

「（前略）乙女、このクレーロス、今日ほど感動したことはございません！ この花はクレーロスより美しき（中略）乙女にお捧げいたします……！ おおなんという幸せ（後略）」

クレーロスはひたすら揉みしぼっているし、サーちゃんは騎士どもの歓呼に応じて泡を吹きまくるし、あたしはその中にぽつんと立たされてるしで、まったく提灯芝居の棒読み役者みたいだった。

「で、これからどうすんのよ」

あたしはもうクレーロスなんかあてにしないことにして、騎士団の連中に言った。考えてみりゃ今までだってあてにしたことなかなかったんだし、味方は増えたんだし、まあいいか。騎士団の連中は全員揃ってきらきらした目つきであたしを見て言った。

「はいっ、聖女さまのおっしゃるまま！」

だから自分で考えろっつーの！

わかった、よく分かった。つまりここの王国の連中は揃いも揃ってこんな奴らばかりなのだ。こんな連中、クレーロスよりも手に負えない。クレーロスには美形という殆ど唯一だけど長所があり、サーちゃんには漏れなく王妃の座と大金がついているのだ。それにマガを見ればカルロ王国とやらも相当ヌルイ連中 だって事は分かる。だってあの魔女だって相当ヌルイもん。なんか負ける気がしない。

「よし、ここは男らしく突撃だ！ てめえら遅れるんじゃないぞ！」

あたしは聖剣をがばっと振り上げて怒鳴り、クレーロスが抱えたままのサーちゃんをひっつかんで外へ走り出した。後ろからわあわあ楽しそうな声を上げて騎士団のバカどもが付いてくる。

城の門の前まで来て、あたしはサーちゃんをしっかりと小脇に抱えながら怒鳴った。

「おいっ、マガ！ 低能魔女！ 年増ババァ、出てこい！」

騎士団のバカどもがおおっと唸る。

「あの凄まじき知謀の主たる『導きの星』を低能とは！ さすが聖女さまはおっしゃることの桁が違う！」

もうバカばっか。あたしが鼻でふんと笑うのと、あの嫌味ったらしい耳に付く声が鳴り響くのと、殆ど同時だった。

「あーらわざわざ本当にあたくしの華麗な魔法で無様に倒されに来たのね、貧乳娘！ お前に聖剣が手に入るはずないからそれとも負けを認めてサティ様をあたくしに譲りに来たのかしら、おーっほっほっほ！」

マガは空中にぷかりと浮かんで腰に手を当て、のけぞって笑っている。

「おいババァ、パンツ見えてるぞ」

あたしはぼそりと呟いた。マガがきゃっ、と変な色気のある声を出して、相変わらずぱっつんぱっつんのミニスカートの裾を押さえ、少し離れた場所にふわりと降り立つ。

「さあっ、サティ様をこっちへお寄越し！」

手を突き出すマガにあたしはにやりと笑ってサーちゃんをクレーロスに渡し、聖剣を抜いた。さっとマガの顔つきが変わる。あ、やっぱこいつ相当年増だ。額に出る皺の数が違う。

「どっ、どっ、どこでその聖剣を……そのマークは『激安王』……！ 貧乳には売るなってあれだけ言ってあったのに！ 潰してやるんだから！」

マガは地団駄を踏みながらキィキィ叫び散らした。あたしはふふんとぬるく笑った。マガの悔しがる姿ってのは本当に気持ちいい。

と、お待ちなさいっと凜々しい声がした。あたしはハッと振り返った。その声は確かにクレーロスだったが、今までの一本抜けたふわふわしたものじゃなく、怒りに震えた鋭い声だった。こいつ、こんな声出せるんだ……ちょっと格好いいかも。あたしが思わずにやりとするのに構わず、クレーロスは怒りのために頬を染めながら『導きの星』！と怒鳴った。

「何ということをおっしゃるのです、貴女という方は！ わたくしはこの前激安王で5%キャッシュバックポイントカードを作ったばかりなのですよ！ 今ちょうど全店

で入会キャンペーン中ですから続々と新規会員が集まっているでしょうに、あろうことかその人々の夢と希望をうち砕き無かったことにしようたくらむとは、何たる不愉快、なんたる無慈悲、おお『導きの星』、貴女という人は、本物の悪だったんですね——？！」

.....5%バック.....？ あたしは一瞬鼻白んだが、とにかくクレーロスのピントがずれているとしか言いようのない言葉にそうだそうだと氣勢をあげた。それに圧されたようにマガはふんつと白々しく笑った。

「まあ潰すのは勘弁してやるわ。どうせ貧乳娘ったら、その辺の屋台で売ってる肉まんでも突っ込んで誤魔化したに決まっているのですものね、おーっほっほっほ！」

そんなわけあるかと言おうとした矢先、クレーロスが何を言うのです、と叫んだ。

「いい加減な事を言わないで下さい『導きの星』！ 肉まんではなく蒸かし饅頭です！」

.....マガより先にクレーロスをぶちのめしていいですか。マガはそんなことだろうと思ったわと甲高く笑った。あたしは聖剣を構えた。

「その秘密、知ったからには生かして帰さん！ ババァ、覚悟！」

——と、マガが突然飛びすさった。ぱっと手を開くとそこに突然釣り竿が現れ、それをふるってマガがぐいっと竿を引く。一本釣りの要領でぽーんと空中を飛んでいくのは——タラバガニ。

「サーちゃん！」

「あたくしとの勝負は城の広間で！ あたくしとサティ様の結婚式の余興にしてさしあげてよ、おーっほっほっほ！」

そんなことを吠えてマガは城の中に駆け込んでいく。

.....あいつ、サーちゃんを一本釣りしたんだな。何だかあたしよりもマガの方がサーちゃんを人間扱いしていないのは気のせいだろうか。ま、蟹なんだけど。

とにかくサーちゃんを取り戻して呪いをといてサーちゃんと結婚してクレーロスをはべらせる。あたしは決意を新たにし、マガを追って、決戦の城へと突入した。

——そして最終決戦は幕を開ける。

あたしは開けると叫んで城門に飛び蹴りをくれた。木のしめった音がするが、さすがにあたしが蹴ったくらいじゃびくともしない。舌打ちしてあたしは振り返り、わあわあ楽しそうに見物決め込む騎士団とかいう馬鹿の集団に向かって叫んだ。

「おいお前ら！ ぼーっと見てないで体当たりでもして扉をぶち壊せよ！」

「おおお何という凄まじい（中略）知略！ 扉が開かなければ壊せばいいとは何という（中略）発想！」

騎士団の馬鹿どもが感動して泣き出すのが見える。泣くな、とあたしは怒鳴った。

「泣いてる暇があったらさっさとやれよ！」

「ああ乙女、あなたという方は何と（中略）素晴らしいのでしょうか！」

クレーロスがぐだぐだ泣きながらさっと花束を出し、あたしに差し出した。こいつの魔法って手品レベルだな、あてにしてないからいいけど。あたしは花束を受け取り、お前、とクレーロスに言った。

「あんまり話しかけないでくれる、気が散るから。お前はここで花壇の整備でもしてろ」

いちいち泣かれてもうるさいし、どうせ役には立たないし、こんな状況で花束を贈るなんて邪魔なだけなのにこいつって、ほんとアホ。余計なことされるより、ここでおとなしく土いじっててくれたほうがマシだ。

と、何を思ったのかクレーロスがぼろぼろと涙をこぼし、乙女、と震える声で言った。

「わ、わたくしは、今まで乙女のお役に立てていない気がしていたのですが、今日やっと、やっとと思う存分お役に立てるのですね——？」

今までも今もこれからもずっと役に立ってないんだが、もう何からどうしてくれようこのアホを。さっきの乙女の秘密をマガにうっかり洩らすという大失態も、多分もう忘れてる。美形じゃなかったらあたしに殺されても文句は言えないはずだ。

「あーもう、そうそう、だからここで花でも咲かせてろ」

相手するのもめんどくさいんだが、クレーロスにはそのほうがよさそうだった。青い瞳をキラキラさせながらはいつと頷く様子がまた絵になる。そのたびに胸がキュンキュンするのがまたやるせない。

ちっ、と舌打ちしながらあたしは城門に向きなおる。騎士団の連中がそろそろ突破を……してない。全然してない。全員で円陣に固まり、何かを相談している。何だよと覗き込むと、誰から体当たりをするのかの順番を真剣に決めているところだった。

「一番の榮譽を是非わたくしに！」

「いやこのわたくしに！」

「愚か者ども、隊長に譲るということを知らんのか！」

「みなさまここは公平にクジを引くことに」

「いやいや公平にここは乙女に決めていただくというのは」

「お前らしい加減にしろ！」

あたしは聖剣で城門をひっぱたいて叫んだ。

「やれって言ったらさっさとやれ！ おいそこのお前！ お前が一番手でそこから時計回りだわかったな」

「何という公平なお裁き！ 我々は心の底から（中略）感動いたしました！」

「わかったから早くしろ」

あたしは一番手の騎士の尻を聖剣で引っぱたいた。ありがとうございますと絶叫しながら騎士が駆けていく。何で一人ずつなんだろうな、あいつら。全員で突撃すれば何とかかなりそうなのに……と思ったら、あのう、と声をかけられてあたしはそいつを見やる。2番手らしい騎士がなくなると手を揉み絞りながら上目遣いで言った。

「あのう、あのう、わ、私にも気合を……！」

言いながらくるりと背を向け、くいと尻を突き出してくる。何だこいつら馬鹿じゃ……馬鹿なのか、そうか……

と思ったら2番手の後ろにずらずらと騎士どもが並び始めるじゃないか。全員が期待に満ち満ちた目つきであたしを見ている。

「聖女様の気合はこちら！ 最後尾はこちらです！」

そんな声も聞こえてきてあたしはめまいをこらえた。こいつら本当に全員馬鹿なんじゃ……馬鹿なのか、そうか……

あたしは2番手の尻を聖剣でひっぱたき、ありがとうございます！ の掛け声と共に突撃していく騎士を苦い顔で見送った。ちらりと横目で確認すると気合行列はすでに最後尾が見えなくなっている。こいつら全員に気合とやらをくれてやってたらマガをぶちのめすどころじゃない。

何か言ってやろうと思ったとき、重い音がして城門が開くのが見えた。まだ二人体当たりしただけで、全然傷ついてもいないんだが、門衛の兵士が次々にあたしに向かって平伏していくのが見えた。

「救国の聖女様、どうか扉の寿命ばかりはお助けを」

「お、おう、今日は勘弁してやるわ」

なんだ守備隊のほうも似たり寄ったりなのか。あたしは聖剣を担ぎなおして城内へ駆け込んだ。騎士団の連中も後ろをきゃっきゃ言いながらついてくる。

初めて入る城の中は意外と綺麗だった。麗しき都とやらが犬の糞だらけのくっそ汚い町だったから身構えてたんだが、期待してた程度の納得は出来る。納得できないのは役にもたたない馬鹿な騎士団やら顔だけ優秀な魔術師やらで、あいつらが食う飯の分だけもったいない。あたしが女王になったらあいつらからまっさきにリストラだ。ま、クレーロスだけは顔に免じて許してやるが、乙女の秘密をわめいた罪は象より重いつてことをそのうち思い知らせてやるぜ、くふふ。

さてサーちゃんとう増ババアはどこだろうとあたしがきょろきょろしていると、走ってきたカルロ王国の連中があたしを見て真横の扉にしがみつき、叫んだ。

「この先の偉大なる魔女『導きの星』とサティラーン15世の待つ広間には絶対に通さん！」

「なるほどババァはこの先か」

「な、何故それを知っているのだ……噂どおりの凄まじい悪知恵の働く女なのだな……」

「それはあたしが救国の聖女だからだ、怪我したくなかったらそこのきな！」

聖剣で絨毯をたたくと、連中はひいっと悲鳴を上げた。

「絨毯の寿命ばかりはお許しを！」

絨毯とマガとどっちが大事なんだ連中は。

「許してやるからさっさとそこ開けろ、ほらほら、絨毯むしっちゃうわよ」

あたしが絨毯の表面をナマクラで撫でると、カル口王国の連中がぎゃっと叫んでひれ伏す。

「気高くお美しく天地創造の神の雷のごとく全てを貫く強靱な魂の愛し子である救国の聖女様どうかお許しを！ このままでは、このままでは絨毯が毛羽立ってしまいます！」

あたしがうふんと上機嫌に笑うのと連中が扉を開くのが一緒だった。あたしが広間に向けこむと、マガが振り返ってもうっ、と地団駄を踏んだ。

「どうしてここがわかったの?! サティ様とあたしの愛の誓いを邪魔する奴は許さないんだから！」

きいきい怒鳴るマガにあたしは聖剣を突きつけて怒鳴った。

「あたしが正義だからだ、わかったかババァ！ サーちゃんを返せ！」

「ふんっ貧乳に渡すサティ様なんていないわよ！」

「貧乳貧乳うるせえぞババァ！ あと3年もすればお前の乳なんて重力に負けて垂れるだけだろ！」

「あーら貧乳には分からない悩みなのによく思いついたわね！ おーっほっほっほ！」

大きき自慢なんて全然うらやましくない。うらやましくなんかないぞ。あんなムチムチよりあたしみたいなスレンダーなほうが可愛いに決まってる。それにあたしのほうがマガより断然頭がいいし、負けてるのは乳だけだ。全然、本当に、心から、悔しくなんかないもんね！

あたしは聖剣を構え、マガに詰め寄った。マガがふんと鼻を鳴らして同じような剣を腰の後ろ側の空間からすらりと取り出し、あたしに突きつけて叫んだ。

「さあ！ 勝負よ貧乳娘！ どこからでもかかっているわっしょい！」

あたしは剣を構えてマガに突っ込む。意外とこの聖剣は振り回しやすく、打ち振る軌道もしなやかで軽い。やるじゃないか激安王——と置いていたら、マガはあたしの剣を打ち返し、剣を振りながら踊り始めた。

「みっ、みっ、ミラクルミラクル♪ プリティチャーム！ とう、とう、トゥインクルトゥインクル☆ スイートハート！ 愛の力で打ち砕け！ 神の怒りの雷光電撃！」

変な踊りだるとにやにや笑って眺めていたあたしは突然の予感に慌ててしゃがんだ。頭上を何か凄まじい勢いで通り過ぎ、背後で派手な音がした。あたしは振り返る。ちょうど樽くらいの大きさに黒々と壁が焦げ、わずかに煙がたちのぼっていた。あんなひょうきんな踊りと呪文を見せられたあとだけに、あたしはぞっと背を震わせる。あたしにくっついてきていたカル口王国の連中と、馬鹿の騎士団が何か叫びながら蜘蛛の子を散らすようにいなくなり、あたしはマガへ向き直った。あのババァ本気だ。本気で殺りに来てる。

「おーっほっほっほ、あたくしの実力が分かったかしら貧乳娘！ 土下座するなら今のうちよ！」

が、こいつに土下座など100回生まれ変わっても嫌だ。それに大丈夫、マガは本当に馬鹿だから。あたしはにやりと笑った。

「誰が土下座なんかするかババア。もう一回やってみせろ、そしたらそんなの無効化してぎったぎたにしてやるから」

あたしは剣を構えてそう言った。マガがきいっと顔をゆがめる。後悔するわよといいながら、剣を振りながら再び踊り始めた。

「みっ、みっ、ミラクルミラクル♪ プリティチャーム！ とう、とう、トゥインク」

あたしは踊っているマガにすたすたと歩み寄り、聖剣を腹につき立てた。トンチキな歌がとまり、一瞬おいてにわとりを締め上げるようなぎゃーっという悲鳴をあげてマガが動きを止めた。ぶるぶる震えながら聖剣を握るあたしの手を掴む。

「ちょ……ま、魔法を唱えてるときに、攻撃は、しないのがお約束でしょ……」

「そんな約束知るか馬鹿」

あたしはマガの腹から聖剣を引き抜き、肩から斜めに斬りつけた。再びマガは悲鳴を上げ、くたくたと座り込んだ。ずるいずるいとつぶやいている声が本当に悔しそうであたしはふふんと笑い、聖剣をマガの額に突きつけて言った。

「お前との約束はこうだ。あたしが勝ったらカル口王国の兵を引き上げてサーちゃんの呪いを解く、そうだったなババア？」

悔しそうにマガは唇を噛み締め、さっと手を振った。空中からぽんっと転がり出てきたのは十字に紐がかけられたカニ。……今から茹でますといった風情にあたしは眉をひそめる。こんな蟹なら料理屋でいくらでも吊られているのを見たことがあるんだが、本当にサーちゃんかと聞こうとしたとき、弱ってはいるが確かにサーちゃんの声がした。

「おおイーリス余の乙女……助けに来てくれたのだな、余は、余は」

言いかけてふしゅしゅしゅという音を立てながらサーちゃんが泡を吹いている。あたしは聖剣でサーちゃんを縛る紐を切り、マガに聖剣を再度突きつけた。

「さあサーちゃんの呪いを解いてさっさと国へ帰れクソババア」

「え……刺されたときにとっくに解けてますけど」

は？ と聞き返そうとしたとき、よろめきながらマガは立ち上がり、傷口を押さえながら許さないんだからね、と叫んだ。

「サティ様とあたくしの永遠の愛を邪魔した呪いをかけてやるんだから！ お前はサティ様と結婚できないわ！」

「はいはいさっさと国へ帰れ年増ババア」

あたしはマガのミニスカートから覗くムチムチの太ももを蹴飛ばした。ぎゃっ、と叫びながらマガの姿が砂絵のようにさらさらと崩れて消えていく。覚えてなさいよと悔しそうな声が最後の一粒と共に消え、あたしはフンと鼻を鳴らした。あたしよりお前のおつむの心配をしろ、ババア。

「イーリスよくやった、余は心から（中略）感激している」

あたしの足元をカサカサとカニが貼っている。マガのババァ、呪いを解いていかなかったな！
あたしはちょっと、と足元のカニに言った。

「あんた元の姿に戻してもらいなさいよ、聖剣でマガも倒したし、乙女の愛も手に入れたし、これでいいんでしょ？」

カニはじっと黙りこみ、目をきょろきょろと不安定に動かした。何だこの怪訝な表情——カニの喜怒哀楽が分かる自分が本当に遠くまできた気がするが——は。あたしはサーちゃん、と強い声を出した。

「マガ呼び戻すなら今のうちだよ。あいつ多分3日寝たらもう忘れてるんだから」

「……い、いや乙女、呪いは解けてるのだから……」

まさかあとあたしは曖昧に笑った。だってサーちゃんは相変わらずひょうきんな……あれ？
タラバガニじゃない……？ あたしは何となく見てくれに違和感を覚えてじっとサーちゃんを見つめる。確かにカニはカニなんだけど、これはタラバじゃなくて……えーと……ズ、ズワイガニ……？ よく見ると足が細いし4対ある。そういやタラバの足は3対なのだ。

どうしたことなのかあたしはぼんやりする。あれ？ だってクレーロスは確かに自分以上に美形だって言ってたような……

知らず知らずあたしはかなり冷たい目でサーちゃんと名乗るズワイガニを見下ろしていたらしい。乙女、と困惑したような声でサーちゃんがはさみを振りながら言った。

「せっかく呪いが解けたのにイーリスはもっと喜んでくれるかと余は思っていたのだが……何か期待に沿わないことでもあるのか？」

「え……いや、だってクレーロスが……美形だって言ってたし……何でまだカニなの？ カニからカニに変わっただけとか新しい呪い？」

「カニではない！」

突然サーちゃんが怒鳴ってあたしはぎょっと背を伸ばした。サーちゃんの甲羅にかーっと朱があがってくる。茹でたみたいに赤い。怒っているのだ。

「余は、余は、呪いであのような忌まわしい姿に変えられていたのだ！ タラバガニなど屈辱極まる！」

「だって、カニはカニじゃん！」

あたしは怒鳴り返した。何だこれ。何だこのカニ。クレーロスと同じくらいの美形の夢はどこ行ったんだ、あたしの夢！ 美形で人間のサーちゃんと結婚してクレーロスを侍らせて一生遊んで暮らすあたしの夢は！ サーちゃんはもう一度カニではないと叫んだ。

「あれはエビ目ヤドカリ下目タラバガニ科タラバガニ属タラバガニ！ 余はエビ目カニ下目ケセンガニ科ズワイガニ属ズワイガニ！」

「何言ってるのかさっぱりわからねえよ！」

あたしはサーちゃんを引つつかみ、甲羅をがくがく揺すりあげた。サーちゃんは泡を飛ばしながらだから、と怒鳴る。

「あれはヤドカリの仲間！ カニじゃない！ 余はカニ！ カニ下目のちゃんとしたカニ！ あれはヤドカリ！」

「知るかこのド畜生が！」

あたしは思い切りズワイガニを膝で蹴り上げた。腹側のやわらかいほうにあたり、サーちゃんがうっと呻いて足をビクビク痙攣させた。慌ててひっくり返すと……あ、割れちゃった……中の肉がはみ出してミソまでこぼれてきそうだ。あたしがじっと腹側を見つめていると、カサカサと腹を隠そうとして動いていた足がだらんと垂れ、サーちゃんが言うのが聞こえた。

「ほ、本当は結婚前はいけないのだが、もう、もう余を、イーリスの好きにして……」

カニにしなを作られて、ぶちんという音をこめかみあたりで聞いた気がした。

「好きにしてやるぜこのカニ野郎がああああああああ！」

絶叫と共にあたしはサーちゃんの甲羅を掴んで床に叩きつけた。サーちゃんはびくびくっと足を動かし、すぐ動かなくなった。

あ……やっべー……やっちゃった……あたしはじっと息絶えたズワイガニを見つめ、そしてさっきマガが焦がした壁にカニを叩きつけた。ちょうど計ったように騎士団の連中が戻ってきて、クレーロスと呼びに行かせる。飛んできたクレーロスは動かないカニを胸に抱えておいおい泣いていたが、やがてあたしを振り返った。

「これからどうしたらいいのでしょうか、わたくしは、わたくしは」

言いながらクレーロスの青い瞳にみるみる涙が盛り上がり、ぽろぽろとこぼれはじめてあたしは奥歯を噛み締めた。これ以上の美形だと聞いてたから手伝ったのに詐欺にかかったのはこっちのほうだと言いかけて、あたしはじっとクレーロスを見る。そういやこいつ、確かサーちゃんの異母弟だったはずだ。

「じゃあお前が王になれ。他にいないなら問題ないだろ」

「えっ？ で、でもわたくしはそんな器では……魔法しかとりえがございませんし……」

こいつあの魔法が自分のとりえだって思ってるのか……

「それにわたくしなどよりも乙女の方がずっとずっと凛々しくお強く気高く叡智の星と栄光の太陽を味方につけたような素晴らしさだと」

説教も買出しも役に立つ魔法も何一つ出来ないくせに、こういう下らない台詞だけは噛まないんだなクレーロス。

「あたしが女王になるのっていいの、それ？」

カルロ王国の連中はマガもないしすぐ追っ払えるけど、あたしは全然血縁というか、カニに親戚なんていないんだがと思うのだが、クレーロスははいっと勢いよく頷いた。

「乙女がずっとこの国を治めてくださるなら何と心強いことでしょう……それに殿下に無体をはたらいたマガを倒し、城を取り戻してくださったのは他ならぬ乙女でございます。きっとみな歓迎いたします」

「そ、そうね、それは確かだわ」

マガに何かを若干押し付けた気がするが、細かいことは気にしない。ねっ、とクレーロスが騎士団を振り返ると、連中は揃って号泣中だった。

「気高くお美しい勝利の聖女様ばんざーい！ ばんざーい！ ばんざーい！」

いいのか、これで？ 若干疑問に思わなくもないのだが、クレーロスをはじめ全員がニコニコと万歳しているのを見ているともうどうでもいいやという気持ちになり、あたしはよし、と力強

く頷いた。

「あたしが新女王になってお前らをもっと使ってやるから覚悟しな！」

万歳三唱が大きくなる中、あたしは泣きっぱなしのクレーロスの手を握り締めて言った。

「それとクレーロス、お前あたしと結婚しな。心配するな、幸せにしてやる」

クレーロスが泣き崩れるのを見下ろし、あたしは聖剣をふりかざした。

「よーしお前ら、あたしに一生ついてきな！」

——かくて王国は再興し、乙女の愛は永遠に王国の守護となる。

<Legend of CrabLand 完>